



2018年

4月人権一口講座



連 繫

熊本大震災から二年が過ぎようとしている。今でも小さな揺れに過敏に反応するのは私だけだろうか。前震後「ふれあい文化センター」は緊急の避難所となった。多くの人々が突然の大地震で危険を察して取るべきものも取らずに避難された。

避難所生活が始まり2日後くらいだった晩のこと、体調を崩したAさんが激しく咳をしたり、夜中にトイレで吐いたりしていた。その状況をみて救急車を呼ぶことになった。

「緊急避難所になっているふれあい文化センターです。体調を崩した避難者の方がいます。至急救急車の手配をお願いします。」

午前3時過ぎであったが、救急車はすぐにやってきた。その後は救急隊の方と患者のAさんと話し合っ
つて、かかりつけの病院へと運んで行った。半日過ぎてAさんは帰ってきた。点滴を打って来たようだが、病名は分らなかった。

避難所運営をしている我々にとってAさんにどう対応するのが適切なのか分らず、中央区の保健師に連絡し、対応の仕方について相談をした。数時間後、保健師から電話が掛かってきた。Aさんのかかりつけの病院は地震の被害を受け停電中で詳しく診察ができるような状況ではなく、病名がはっきり分かる検査は行えなかった、ということであった。それでも医師の診たてでは急な避難所生活という環境の変化による神経性のものだろう、ということだった。

私は救急車を呼んだとき、普通に病院へ搬送して頂いたと思った。しかし、被災した病院が救急車をよく受け入れてくれた、と感じた。自家発電は稼働していたかもしれないが、薬品類、パソコンなどの機器、書類など散乱していたであろう中での受け入れだからだ。本当に感謝したい。人間を救うのは人間なのだつくづく感じた。

(熊本市ふれあい文化センター広報紙「かけはし」より)



短いメッセージ 新一年生に会ったら「よろしくねっ」て
言われたよ 心も体も うれしくなるね

熊本市・熊本市教育委員会・熊本市人権啓発市民協議会のカレンダー 引削小学校 6年 中山 遙菜さん (H29年度) の作品より